

下田原式土器の分類と編年試案

New Classification and Chronology of Shimotabaru Type Pottery

岸本 義彦

KISHIMOTO Yoshihiko

ABSTRACT: The classification of Shimotabaru type pottery of the Neolithic Southern Ryukyu(Miyako and Yaeyama islands)period has been proposed several times. However, the insufficient number of the specimen and their limited distribution have prevented a deeper understanding of the type. A new, decoration-based scheme of classification is presented here, revealing the chronological development of the pottery. The overall trend is that the decoration changed from linear pattern to dotted pattern, and later, all such markings gradually disappeared.

はじめに

南琉球新石器時代を代表する下田原式土器については、先島地域（宮古諸島・八重山諸島）最古の土器であることがわかっているだけで、その起源や土器の性格など詳細なことは長年不明のままであった。ところが、1978年に発掘調査が行われた石垣島の大田原遺跡の調査成果により、従来の早稲田編年を覆す重要な発見があった。それは隣接する神田貝塚との時期的前後関係が層序により明らかにされたことである。すなわち、早稲田編年の第一期に属し、古いと考えられていた無土器遺跡の神田貝塚が、第二期に属する大田原遺跡より上位にあり、第一期と第二期が編年上逆転したことである。そのことは、これまで定説になっていた早稲田編年の見直しが余儀なくされると同時に、先島地域の考古学研究の転換期ともなったのである。

また、1983年から3ヶ年継続事業で行われた波照間島の下田原貝塚と無土器遺跡の大泊浜貝塚でも層序の前後関係が確認され、これによって第一期と第二期の逆転がゆるぎないものになった。さらに、1991年の多良間島添道遺跡における下田原式土器の発見は、これまで確認されていなかった宮古諸島にも下田原式土器文化が波及していたことを物語る画期的なものとなった。1995年に発掘調査が行われた石垣島のピュウツタ遺跡においては、従来知られていなかったタイプの土器が下層から検出され、下田原式土器のプロトタイプになる可能性がある貴重な発見となった。

このように、下田原式土器に関する新知見が相次ぎ、該土器の様相がより詳しくわかるようになってきた。ここでは、これまでの調査研究を踏まえ、下田原式土器の分類と編年を試みることにする。

なお、下田原式土器の出土が確認されている遺跡は、管見の及ぶ限り図1に示した14箇所が知られている。遺跡数が少ない感もあるが、今後の調査如何によっては遺跡も増加する可能性がある。

下田原式土器の調査研究小史

下田原式土器に関する調査研究は、1954年3月に金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文らによって行われた波照間島下田原貝塚の発掘調査を嚆矢とする（金関ほか1955）。その時にこれまで八重山地域で知られていなかった土器が検出された。翌1955年には多和田真淳によって西表島の仲間第二貝塚の調査が行われ、下田原貝塚のものと同様の土器を採取し、1956年に該土器を「仲間第二式土器」と型式設定している（多和田1956）。

1958年には早稲田大学八重山学術調査団による総合調査が実施され、考古班は多和田真淳の協力の

もとに、石垣島、西表島、波照間島、黒島の数遺跡の発掘調査及び地表踏査を行った。その調査には前述の下田原貝塚や仲間第二貝塚も含まれ、土器資料が追加されると同時に、調査の成果を踏まえて、調査団による八重山の考古学的編年が確立された(西村正衛ほか1960)。いわゆる早稻田編年と称されるもので、文化様相の相違で四期に区分されている。第一期は土器を伴わず、石器や貝殻などが出土する時期で、仲間第一貝塚が属し、八重山では最も古い時期に位置づけている。第二期は厚手の土器と石器・貝器等を有する時期で、代表的な遺跡として下田原貝塚や仲間第二貝塚をあげている。第三期は外耳土器を主体に輸入陶磁器や鉄製品等を伴う時期で、山原貝塚や平西貝塚など多くの遺跡が属する。第四期はハナレ系(パナリ焼)土器や輸入陶磁器等を伴う比較的新しい時期で、大原貝塚や川平貝塚などに代表される。

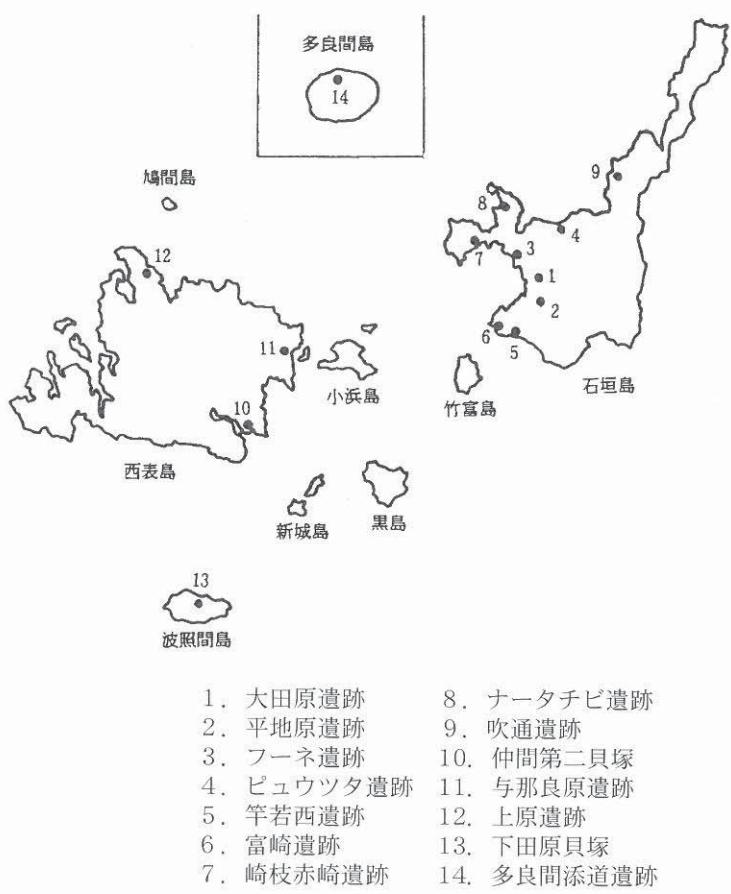
1969年には沖縄の考古学研究を進めていたR.J.PEASONによって一連の厚手の土器を「Shimotabaru Type」と称された(PEASON1969)。また、1972年には下田原貝塚の調査者でもある国分直一によって「下田原式土器」と型式設定が行われている(国分1972)。さらに、1977年には大濱永亘・新田重清・安里進により名蔵の北側に位置するフーネ遺跡から見つかった土器に「赤色土器」という名称が与えられた。フーネ遺跡の土器に爪形文などを施したものがあり、これまで無文土器と考えられていた該土器に有文資料も含まれることが判明した(大濱ほか1977)。大濱永亘は石垣島や西表島などから採集した土器のタイプや文様の有無によって次の四型式に分類している(大濱1998)。

①無文土器—下田原式土器

②有文土器 爪形文—フーネ式土器、指頭圧痕文—平地原式土器、沈線文—仲間第二式土器

このように、これまでに様々な名称が与えられてきたが、学史的には多和田真淳が最初に唱えた「仲間第二式土器」を該土器の型式名とすることが妥当であると考えられる。ただ、戦後最初に行われた下田原貝塚の発掘調査が沖縄考古学研究に多大な貢献を成し遂げたことにより、下田原貝塚の名称を冠した「下田原式土器」という型式名が採用されるようになり、現在では広く使われている。

1978年、沖縄県教育委員会による石垣市名蔵在の大田原遺跡・神田貝塚発掘調査において、これまでの早稻田編年を覆す画期的な新事実が確認された(金武ほか1980)。すなわち、下田原式土器を伴う大田原遺跡(台地上)と、その下方の砂丘地に形成された無土器の神田貝塚の層序が重複した地点(37ライン)が確認され、前者の遺物包含層が後者の遺物包含層よりも下位に位置することが認められた。そのことから、これまでの早稻田編年の第一期(無土器)と第二期(下田原式土器)が時間的に逆転することが判明した。



この事実は、1983年から3ヶ年継続事業で発掘調査が実施された波照間島の下田原貝塚と大泊浜貝塚でも同様に確認され、八重山新石器時代の編年の修正が余儀なくされた（金武ほか1986）。

これらの調査成果をもとに、調査担当者であった金武正紀は新しい編年試案を発表した（金武ほか1991・1994）。また、シャコガイ製貝斧を軸に先島とフィリピンの先史時代文化の関連性を調査研究している安里嗣淳も独自の編年試案を発表している（安里1993）。さらに、高宮廣衛（高宮1996）や大濱永亘（大濱1999）、當眞嗣一（當眞1976）らも独自の編年案を発表している。

下田原式土器の出土する遺跡は八重山地域でしか確認されていなかったが、1991年の多良間村遺跡詳細分布調査において、下田原式土器を伴う遺跡（多良間添道遺跡）が発見され、その文化が宮古地域にも伝播していたことが実証された（岸本1993）。

1995年には、石垣市教育委員会が行ったピュウツタ遺跡の発掘調査により、従来の下田原式土器より古いタイプと思われるラフで太い線文を施した土器が検出され、該土器の起源を考えるうえで一石を投じると同時に、先島の文化源流を究明するうえで重要な発見となった（島袋ほか1997）。

下田原式土器の概念と分類

下田原式土器の一般的概念について、これまでの資料からみると、図2に示したように、器形は口縁が若干窄まり、胴下半部が膨らむ鉢形をなす。底部は立ち上がり部分の角がとれた丸底的な平底をなし、安定した底部となっている。口唇の形状は丸状ないし舌状を呈するものと平坦になるものがある。文様を有する資料はそれほど多くないが、爪形押紋と沈線文が基本になっている。口縁付近には対になる把手（牛角状・円筒状・円錐状）を貼付するのが特徴で、なかには横耳状の把手を貼付したものもある。器壁は相対的に厚く、底部では3cmを超し、胴部でも2cm内外ある。まれに6～7mmの薄手の土器もある。色調は赤褐色を呈するものが主体をなし、胎土に粗粒石英や長石が多く含まれている。器面はほとんどがナデ調整である。

下田原式土器の分類については、これまでに金武正紀らが大別・細別を試みている。金武は大田原遺跡の調査報告書のなかで、4000個余りの土器破片が得られたが、全体形がうかがえないことから、文様や把手、混入物、焼成、色調などの諸特徴で大きく4類に分類し、さらに口縁部の形態で細分している（金武ほか1980）。

下田原式Ⅰ類土器は、器壁厚が1.5～3.0cmと分厚く、石英、長石などの粗い混入物が非常に多く、器面に露出してザラザラする。焼成も脆弱で暗褐色及び赤褐色を呈する。幅広の爪形押紋を横位に施す

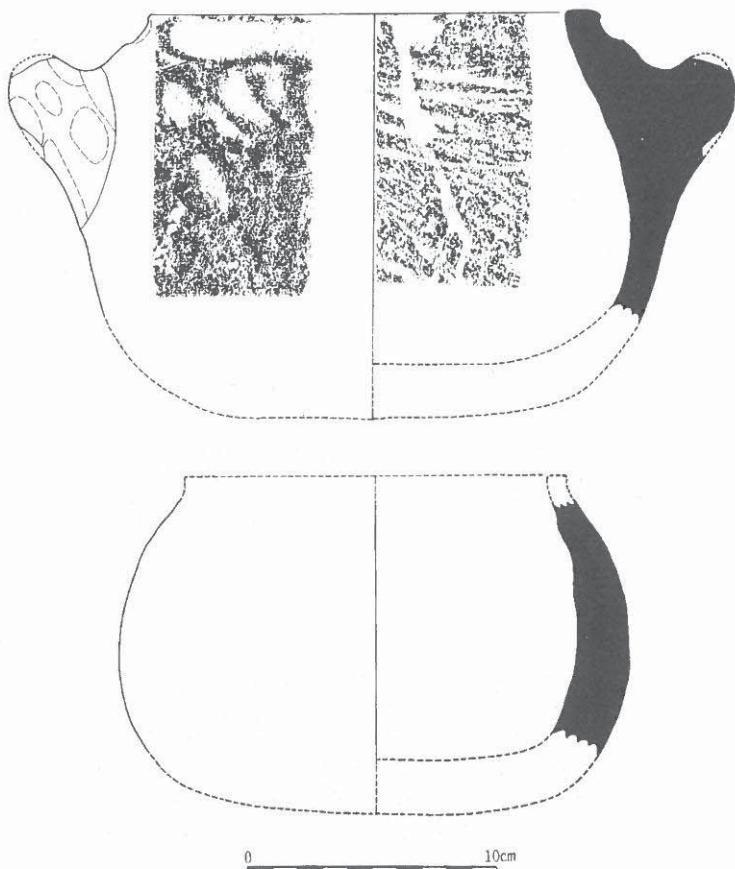


図2 下田原式土器（下田原貝塚）

が、わずかに縦位の施紋もみられる。把手は円柱状の大きなものが特徴的である。口縁部の形態でさらに2種に細分できる。

下田原式Ⅱ類土器は、器壁厚が1.0~2.0cmの厚手であるが、Ⅰ類土器に比べて若干薄い感じである。直径2mm以下の石英や砂粒を含むが、量的には少ない。焼成はⅠ類土器より良く、器色は赤褐色を呈するものが圧倒的に多い。紋様は爪形押紋のほかに、単籠による押引紋がある。把手は牛角状のものが特徴的である。口縁部の形態でさらに4種に細分できる。

下田原式Ⅲ類土器は、器壁厚が0.5~1.0cmの薄手土器で、直径1.5mm以下の石英や砂粒を多く含む。焼成はやや脆弱で、小型の鉢形土器と考えられる。紋様は細沈線紋が多く、ほかに爪形押紋、刺突紋、連点紋などがみられる。口縁部の形態でさらに3種に細分できる。

下田原式Ⅳ類土器は、器壁厚が0.5~1.0cmの薄手土器で、直径1.5mm以下の細粒の石英や砂粒などをわずかに含む。焼成は良好で器面調整も良い。4類のなかでは最も硬質である。紋様は細沈線紋がみられる。Ⅲ類と同様に小型の鉢形土器になると考えられる。口縁部の形態でさらに2種に細分できる。

以上のように分類を試みているが、それが時期差によるものなのか、セット関係なのかは現段階では判然としないということである。

また、金武は下田原貝塚の発掘調査報告書のなかで以下のような土器分類を試みている（金武ほか1986）。下田原式土器の基本的な器形は、丸底に近い平底で、胴部が脹らみ、胴部から口縁部へと内弯し、最大径が胴部にある内弯形の浅鉢である。土器の大きさにバリエーションがあり、口径が10cm前後の小型のものから、25cm前後の大型のものまでみられるところで、器壁の厚さに主眼をおいて、その違いで大きく2群に分類している。すなわち、器壁厚が11mm以上の厚手土器をA群、10mm以下の薄手土器をB群としている。

さらに、口縁部の形態に着目し、次の3類に分類している。

第Ⅰ類（内弯口縁）は、口縁部が内側に大きく彎曲するもので、口縁先端が尖り気味になっている。頸部は無く、「無頸の内弯形口縁」をなす。

第Ⅱ類（外反口縁）は、口唇が平坦に成形され、口唇内端が内側へ延びず、口唇部の内端、外端とも僅かに外反する。短い頸部が認められ、「有頸の外反形口縁」をなす。

第Ⅲ類（直口口縁）は、口縁部先端が丸味をもつ口縁で、基本的には内弯も外反もしない直口形の口縁である。頸部は無く、「無頸の直口形口縁」をなす。

上記の分類により、A群土器とB群土器の出土量を比較した場合、前者が90%と圧倒的多数を占め、下田原式土器の主体をなしていることがうかがえる。また、B群土器は直径10cm前後の小型土器になるものと考えられ、A群土器とB群土器の違いは土器の大きさの違いで、いわゆる機能が異なっているということがいえる。

また、口縁形態で分類した土器の出土状況は、第Ⅰ類a・bと第Ⅱ類a・bはほとんど第Ⅳ層および第Ⅲ層からの出土で、第Ⅱ類c・dと第Ⅲ類は第Ⅲ層と第Ⅱ層から出土している。そのことから両者に若干の時間差をみることができるが、ここでは問題提起にとどめると結論づけている。

阿利直治・後仲筋正徳は1980・81年に発掘調査が行われた大田原遺跡の報告書で、金武正紀が行った分類基準とは異なった分類を以下のとおり行っている（阿利ほか1982）。

器形はいずれも口縁部が全体的に内傾する内湾形を示し、口縁部の形状で3類に分け、さらに2~3種に細分している。

I類は、口唇を平坦に成形したもので、さらに口唇部直下に凹線を施すもの、凹線を施さないもの、

口縁が内面側に突き出るもの3種に細分できる。

Ⅱ類は、口縁部上端外面から口唇部にかけて丸みを帯びるもの。

Ⅲ類は、口唇部の幅が狭くなるもので、先端が丸みを帯びるものと、口唇部が尖り気味で、口唇直下に凹線を施すものの2種に細分できる。なお、分類結果については何ら触れていない。

島袋綾野は石垣市ピュウツタ遺跡の調査報告書のなかで、下田原式土器を次のように分類を試み、考察を述べている（島袋ほか1997）。

口縁部の形態に着目し、3類に分け、さらに細分を試みている。基本的には下田原貝塚の分類基準を踏襲しているが、ピュウツタ遺跡では第Ⅲ類をa・bタイプに細分している。

第Ⅰ類は、口縁部先端が尖り気味で内側へ延びる内湾形をなす。口唇部直下に指ナデによるくぼみの有無で2種に細分している。

第Ⅱ類は、口唇部が平坦に成形され、口縁部が僅かに外反し、頸部に指ナデによるくぼみを有する外反形をなす。口縁部の形状でさらに4種に細分している。

第Ⅲ類は、口縁部が内湾も外反もしない直口形をなし、口唇部先端が丸味を帯びるものと尖り気味になるものの2種に細分している。

分類別の出土状況等については特に分析などは行っていないが、表1からすると、Ⅲ層、V層ともに第Ⅰ類と第Ⅲ類の出土が多く、両者には時間差がないように思われる。また、第Ⅱ類はV層からの出土がなく、第Ⅰ類と第Ⅲ類に比べて時間的に下るものと考えることができる。

表1 ピュウツタ遺跡・出土土器類別出土状況

類別 層序	第Ⅰ類		第Ⅱ類				第Ⅲ類		計
	a	b	a	b	c	d	a	b	
表土・攪乱	4	4	2	2	0	0	3	0	15
Ⅲ層	12	4	3	0	1	1	8	3	32
V層	4	0	0	0	0	0	8	2	14
計	20	8	5	2	1	1	19	5	61

（島袋綾野作成 1997）

また、他の遺跡に比べて有紋土器の出土が目立ち、紋様の形態にもバリエーションがみられる。島袋はV層から出土した太沈線紋土器に注目し、下田原式土器の範疇に入るものとしながら、Ⅲ層から出土している爪形紋土器よりも古手の様相を呈していることを述べている。ただ、初めての出土例であり、比較資料がないことから、問題提起にとどめている。

以上、下田原式土器の分類等について、これまでの報告を概観してきた。出土土器の大半が小破片で、器形のうかがえる資料に乏しいことから口縁部の形状や器壁の厚さ等によって分類していることはいたしかたのことであるが、今後の資料の増加に伴って新たな分類概念が確立できると思われる。

下田原式土器の分類試案

下田原式土器の分類は、これまで口縁部の形状や器壁の厚さなどに基準を設けて行っているが、ここでは紋様形態に主眼を置き、他の要素を組み合わせて分類を試みることにする。

下田原式土器のなかでは有紋資料は少なく、これまで確認されているものでも破片にして僅か70点余の数量である。大田原遺跡やピュウツタ遺跡などで出土しているこれら有紋土器の名称は以下のよ

うになっている。

- 大田原遺跡（沖縄県教育委員会による発掘調査）
 - ・爪形押紋，押引紋，円形押付紋，細沈線紋，刺突紋，連点紋
- 大田原遺跡（石垣市教育委員会による発掘調査）
 - ・爪形文，沈線文
- ピュウツタ遺跡
 - ・爪形紋，刺突紋，太沈線紋，細沈線紋，短沈線紋
- 仲間第二貝塚
 - ・爪形文，沈線文，山形押型文
- フーネ遺跡
 - ・爪形文
- 多良間添道遺跡
 - ・爪形文，沈線文，点刻文
- 下田原貝塚
 - ・細沈線紋

以上のように、紋様形態の違いによって様々な名称がつけられているが、基本的には爪形紋と沈線紋、刺突紋の要素から成り立っており、それらの組み合わせでバリエーションが増えている。これらの紋様要素について詳しくみると、次のようになる。

◇爪形紋—器面に爪を連続で押しつけて施紋したもので、横位、縦位、斜位に展開し、さらにこれらを組み合わせたものもある。紋様の幅や施紋の深さに差違がみられ、施紋具（指？）の違いによるものと思われる。

◇沈線紋—器面に先端の尖ったものや棒状の工具により施紋したもので、沈線の幅の違いで太沈線と細沈線に分けられる。沈線紋の方向は爪形紋と同様に横、縦、斜めがある。ピュウツタ遺跡のV層から出土した太沈線紋は従来の下田原式土器にはみられなかった紋様で、古式を帶びていると考えられる。

◇刺突紋—器面に棒状工具を突き刺して施紋したもので、口唇部に施す例もある。点刻紋や連点紋なども基本的にはこのグループに含まれる。

また、これらの紋様の施紋方法をみると、点紋系と線紋系に大別できる。爪形紋と刺突紋は爪もしくは施紋具を用いて器面に突き刺しては離しながら連続して施紋する点紋系に属する。それに対して、沈線紋は器面を施紋具でなぞって線を引いたもので、線紋系に含まれる。

このような紋様は、器面調整の際の条痕、擦痕、指頭押圧などの紋様とは異なり、意図して施紋したもので、いわゆる意匠紋である。紋様構成が縦、横、斜めと直線的な構成に終始し、縄文土器などにみられる円構成や渦紋などの複雑な紋様がなく、極めてシンプルなものとなっている。

以上、紋様要素などを勘案して下田原式土器を下記のように分類基準を定め、分類を試みた。

I 群土器—線紋系土器（棒状の施紋具で器面をなぞって線紋を施したもの）

第1類土器—幅広線紋土器

・幅1mm以上の線紋を縦位、斜位に施したもの。

第2類土器—細沈線紋土器

・幅1mm以下の沈線を縦位、斜位に施したもの。

II 群土器—点紋系土器（爪や棒状の施紋具で器面を突き刺して点紋を施したもの）

第3類土器—爪形紋土器

・爪により連続で突き刺し、縦位、横位、斜位の方向に施したもの。

第4類土器—刺突紋土器

・棒状の施紋具により連続で突き刺し、縦位、横位、斜位の方向に施したもの。従来の点刻紋、連点紋なども含む。

基本的には上記の2群、4類に分類できるが、線紋と点紋を組み合わせた資料もあり、それらは主となる紋様の類に含めた。

先述した各遺跡の有紋土器をこの分類にあてはめると以下のようになる。

第1類土器—太沈線紋（ピュウツタ）

第2類土器—細沈線紋（大田原・下田原・ピュウツタ）、短沈線紋（ピュウツタ）、沈線文（大田原・仲間第二・多良間添道）

第3類土器—爪形押紋（大田原）、爪形紋（ピュウツタ）、爪形文（大田原・仲間第二・多良間添道）

第4類土器—円形押付紋（大田原）、刺突紋（大田原・ピュウツタ）、連点紋（大田原）、点刻文（多良間添道）

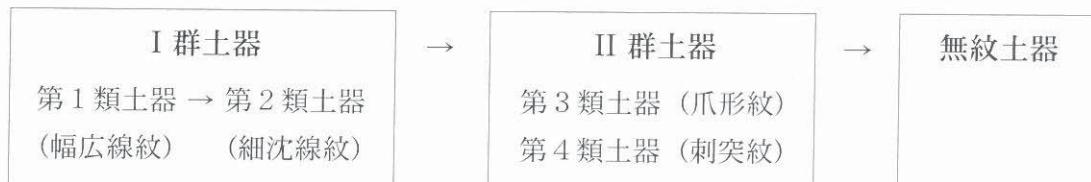
下田原式土器の編年試案

以上、下田原式土器の紋様要素などに焦点をあてて2群の大別と4類の細別を試みた。これらの紋様要素は時間差による違いなのか、同時期におけるバリエーションなのか意見が分かれるところであるが、ここでは時間差によるものと推察し、各遺跡での出土状況などを考慮して編年を試みることにする。

まず、紋様の違いが時間差によるものと考えた要因は、ピュウツタ遺跡での出土状況と他の遺物、特に貝製品・骨製品の出土頻度が遺跡によって異なっていることからである。ピュウツタ遺跡での出土状況を詳しくみると、無遺物の白砂層を間層として上下に遺物包含層が確かめられた。上層をⅢ層、下層をV層としており、いずれもプライマリーな文化層で、それぞれの層から特徴的な土器が得られている。図3に示したもので、Ⅲ層から刺突紋や爪形紋などの点紋系が出土し、V層から太沈線紋や細沈線紋などの線紋系が出土している。これらの出土状況から点紋系土器より線紋系土器が時間的に古くなることがうかがえる。特にV層の太沈線紋土器はピュウツタ遺跡において初めて見つかったもので、下田原式土器のプロトタイプになることが考えられ、ここではピュウツタタイプとして捉えることとする。今後の類例資料の追加を待って新たな型式設定が可能と思われる。

以上のように、下田原式土器の紋様の変遷から先述した類別の時間的な流れをみると、I群土器からII群土器へという図式がみられ、さらにI群土器のなかでは第1類土器（幅広線紋土器）から第2類土器（細沈線紋土器）への推移が考えられる。II群土器の第3類土器（爪形紋土器）と第4類土器（刺突紋土器）は時間的な前後関係について判然としない。また、細沈線紋と刺突紋や爪形紋を組み合わせている紋様構成の土器も確認されており、I群土器とII群土器の中間型式になると考えられる。これらを分かりやすくすると、下記のようになる。

また、遺跡間で時間的な前後関係をみると、現時点ではピュウツタ遺跡V層が最も古く位置づけら



れ、次いで大田原遺跡・仲間第二貝塚→多良間添道遺跡・ピュウツタ遺跡Ⅲ層→フーネ遺跡→下田原貝塚というような流れが考えられる。

ここで下田原式土器の垂直分布と水平分布について考えてみたい。垂直分布としたものは下田原式土器の時間的スパンのことである。これまで年代測定値からおよそ3,500年前に位置づけられているが、時期的上限と下限がよくわかっていない。ようするに下田原式土器の存続期間が不明である。また、南方（例えは台湾やフィリピンなど）での類例資料が確認されてなく、比較検討もできない状態では既成の資料を詳細に分析する方法に頼らざるを得ない状況となっている。

水平分布としたものは下田原式土器の空間的な広がりを示す。現時点では八重山諸島の石垣島と西表島に集中する傾向にあるが、宮古諸島の多良間島でも確認されていることから、今後の調査如何によって先島諸島全体に広がりを見せる可能性がある。また、下田原式土器の存続期間を考慮すると、その期間のなかでほぼ同じ時期（同時併存）の遺跡がどのような分布をなしているかを確認することによって、下田原式土器の時間的な拡散を把握することが可能である。

おわりに

以上、下田原式土器の分類と編年について試案を述べたが、数量的に限られた資料を扱って試みた不安は拭えない。ただ、これまで紋様に焦点をあてて土器分類を行った事例がなく、その点では新たな視点での分類及び編年試案は今後の下田原式土器研究に一石を投じるものと思われる。

問題が山積している下田原式土器について、今後とも調査研究を進めていくうえで多方面からのアプローチが必要となってくる。今回は第一段階として紋様による分類・編年を試みてみた。このことは下田原式土器の紋様要素の違いは時間差によるものであるという前提のもとに行ったものであり、これから調査研究によって修正される可能性もある。大方のご批判を願う次第である。

なお、石垣市史編集課の島袋綾野さんには資料の提供などご協力をいただいた。末尾ながら記して感謝を申しあげる次第である。

（きしもと よしひこ：調査課 主任専門員）

【参考文献】

- 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文 1946 「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告』
人文学科篇 9号
- 多和田真淳 1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
- 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚 1960 「八重山の考古学」『沖縄・八重山』早稲田大学八重山学術調査団
- R.J.PEASON 1969 'The sequence in the Sakishima Islands Archaeology of The Ryukyu Islands'
UNIVERSITY OF HAWAII PRESS
- 国分直一 1972 『南島先史時代の研究』 慶友社
- 當眞嗣一 1976 當眞嗣一「八重山の遺跡とその文化」『八重山文化』第4号 八重山文化研究会
- 大濱永亘・新田重清・安里進 1977 「フーネ遺跡発見の土器によせて」 沖縄タイムス 12月20日～23日朝刊
沖縄タイムス社
- 大濱永亘 1999 『八重山の考古学』 先島文化研究所
- 金武正紀ほか 1980 「石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告一大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡一」沖縄
県文化財調査報告書第30集 沖縄県教育委員会

- 阿利直治ほか 1982 「大田原遺跡—沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書一」 石垣市文化財調査報告書第4号 石垣市教育委員会
- 金武正紀ほか 1986 「下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告一」 沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会
- 金武正紀 1991 「先島の時代区分」『琉球史フォーラム』 名護市教育委員会
- 金武正紀 1994 「土器→無土器→土器—八重山考古学編年試案一」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 安里嗣淳 1993 「南琉球の原始世界—シャコガイ製貝斧とフィリピンー」『海洋文化論』 凱風社
- 岸本義彦 1993 「多良間村の遺跡—村内遺跡詳細分布調査報告一」 多良間村文化財調査報告書第10集 多良間村教育委員会
- 岸本義彦 1996a 「多良間添道遺跡—発掘調査報告一」 多良間村文化財調査報告書第11集 多良間村教育委員会
- 岸本義彦 1996b 「南琉球の下田原式土器とその遺跡」『史料編集室紀要』第21号 沖縄県立図書館史料編集室
- 高宮廣衛 1996 「南島考古雑録（Ⅱ）」『沖縄国際大学文学部紀要社会篇』第20巻第2号 沖縄国際大学文学部
- 島袋綾野 1997 「名蔵貝塚ほか発掘調査報告—名蔵貝塚・ピュウツタ遺跡発掘調査報告書一」 石垣市文化財発掘調査報告書第22号 石垣市教育委員会

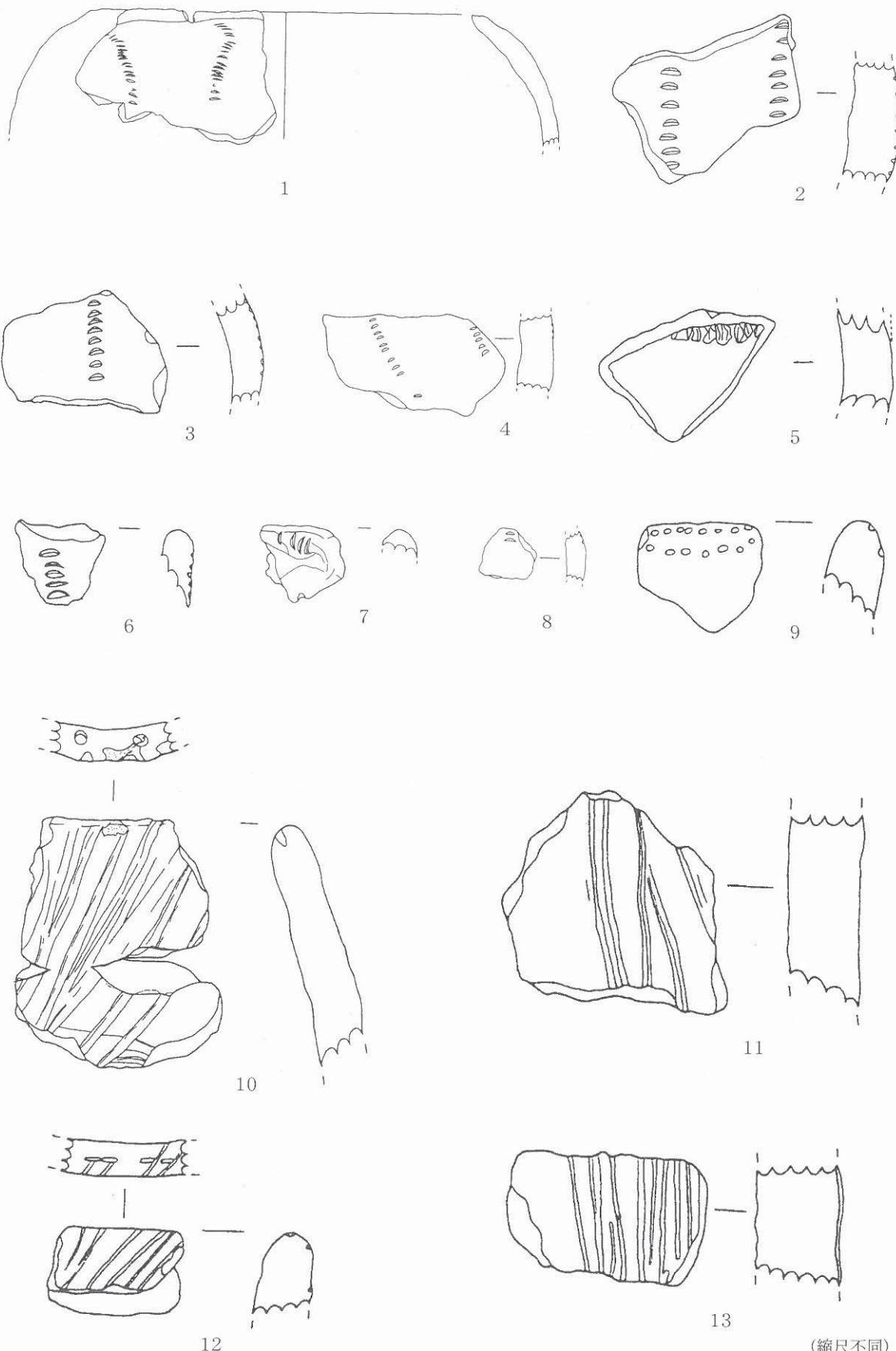
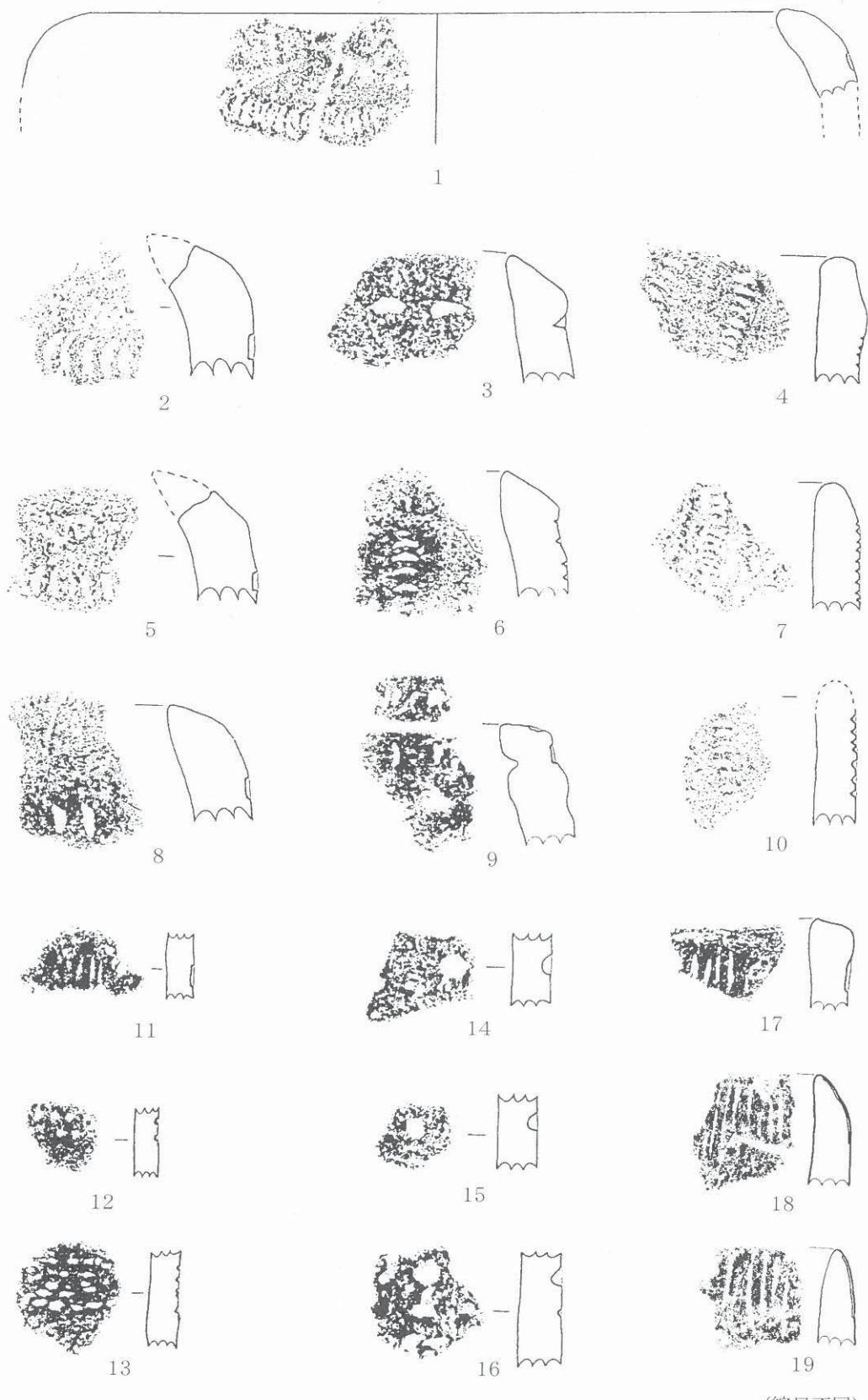


図3 ピュウツタ遺跡の有紋土器

表面採集及び表土層の爪形紋 (1~5)
Ⅲ層出土：爪形紋 (6~8) 刺突紋 (9)
V層出土：太沈線紋 (10・11) 細沈線紋 (12・13)

(縮尺不同)



(縮尺不同)

図4 大田原遺跡の有紋土器

爪形押紋 (1~10) 短波線紋 (11) 刺突紋 (12)

連点紋 (13) 丸形押紋 (14~16) 沈線紋 (17~19)



(縮尺不同)

図5 各遺跡の有紋土器

大田原遺跡（1～6） 下田原貝塚（7） 多良間添道遺跡（8～10）
仲間第二貝塚（11～18） フーネ遺跡（19～21）